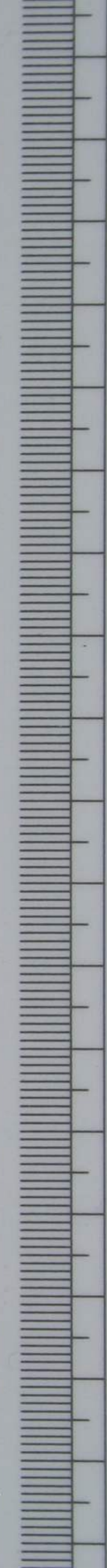


金 鈔 集  
雅 子 作



55

60

65

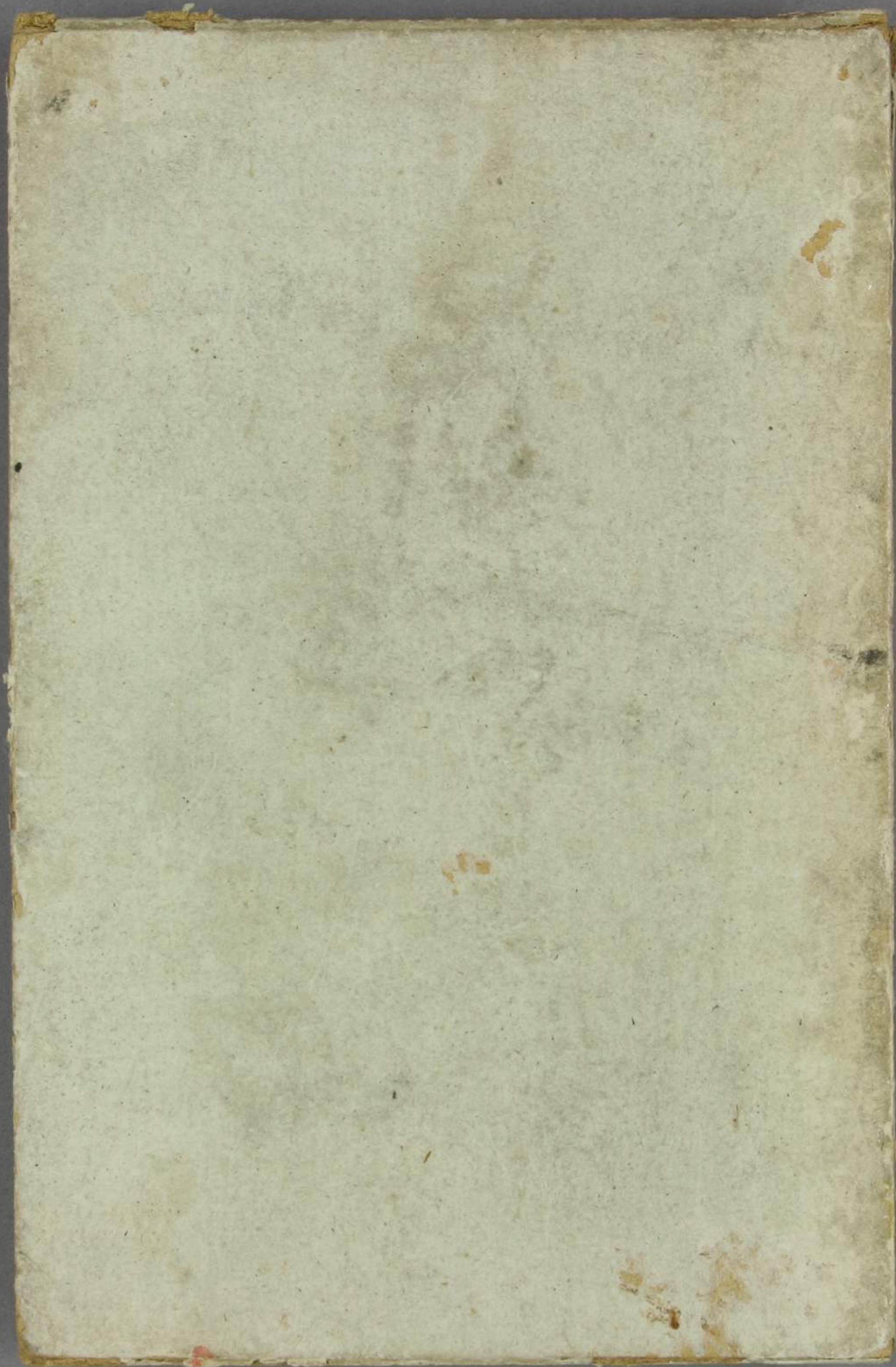
70



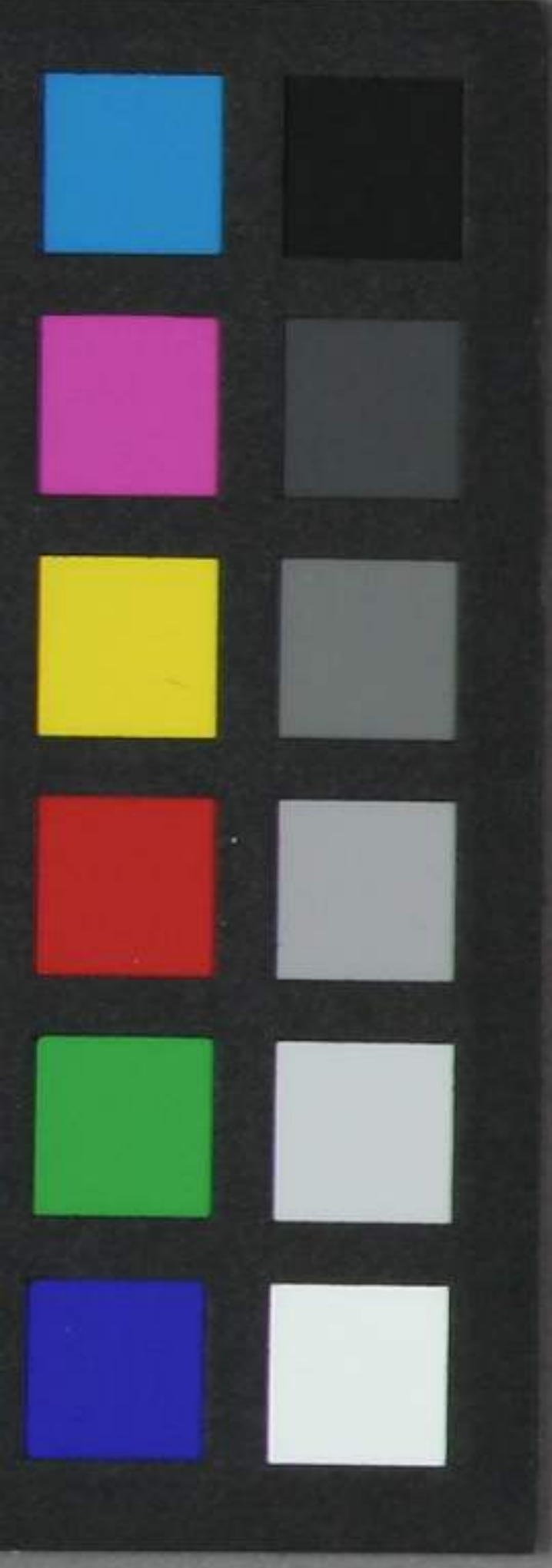
金沙集

雅子作

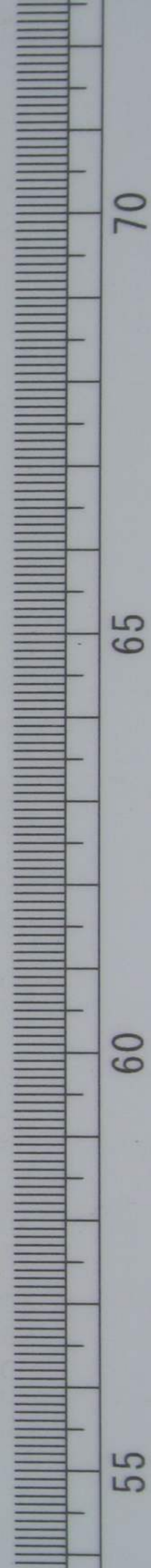








金少集  
雅子作



55

60

65

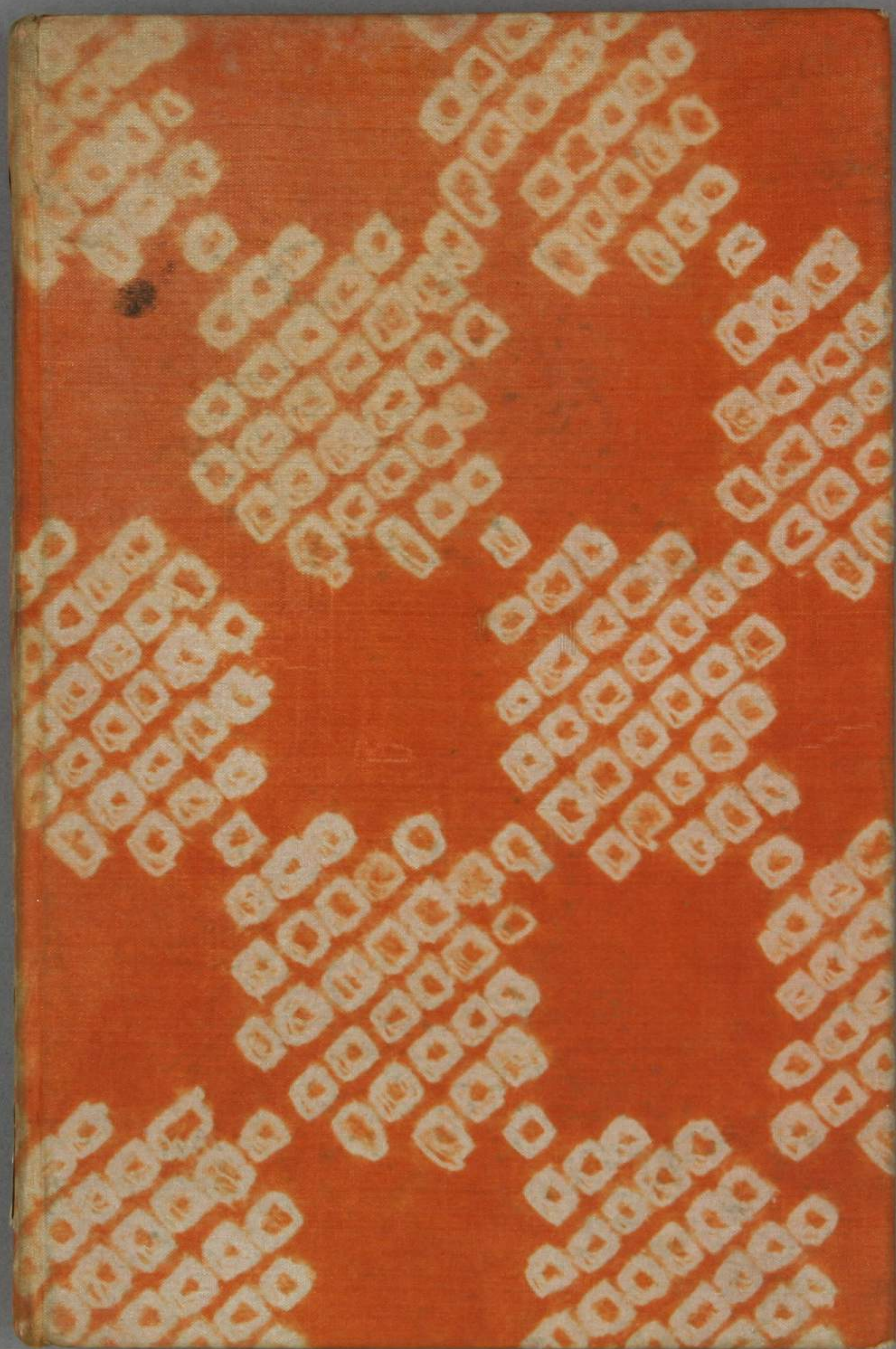
70



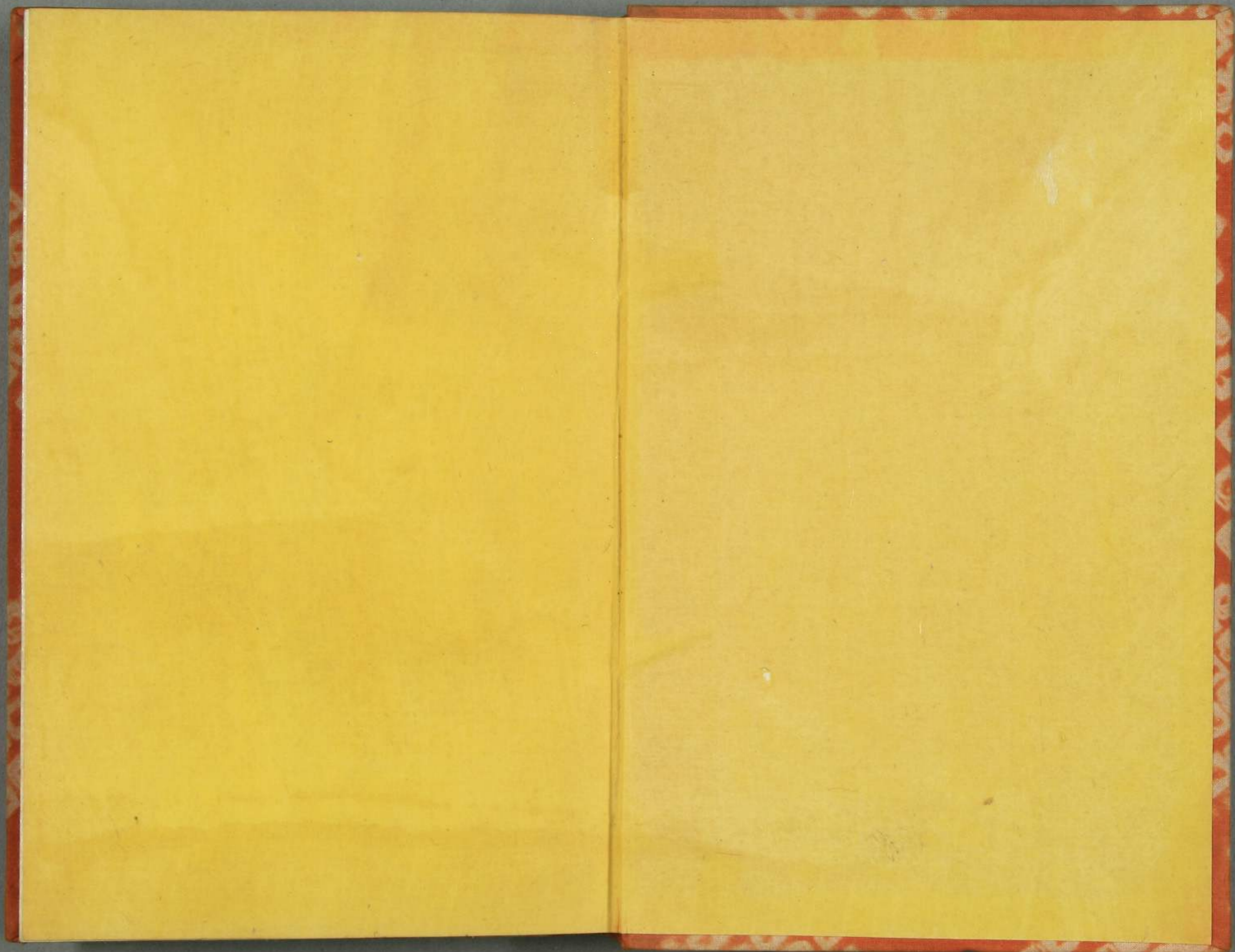
金沙集

雅子作











金沙集  
雅子

金沙集  
雅子



亡き父母にささぐ

全  
家  
葬  
儀  
式



きとめの日



をとめ

一

すなほなる我が黒髪を撫づるにも若き命の  
惜しまるるかな



二

匂ひよき黒髪かづきある限り夢よりさめぬ  
少女をなるらむ

美しき夢よりほかに何ごとも思はぬ我れと  
いつなりにけむ

三

心こそ神に似たれと言ふことをはばからざ  
りし我れにやはあらぬ

銀の糸くれなるの糸亂れたる中に我れ居て  
ものを思へり



四

かなしみはつひにをとめを離れざり水いろ  
となりうすき朱となり

我れながら美しきかなこの涙玉によそへむ  
花にたぐへむ

五

うら若き夢のごとくに風ふきぬ亂れそめた  
る心しらねば

春の雲うす紅に谷いでぬもの戀ひそめし心  
のやうに



六

花さうび甘き匂ひを持つ如く若きころに  
憂うれひかをれり

10

若葦の根にくちづけて行く水の如く寂しく  
物をこそ思へ

七

我れ生みの母さへ知らで世にあれば少女と  
いへどうら寂しさを

黒髪あざみに薊あざみはな咲けかりそめに少女と名のる  
身は悲しけれ

11



八

白芥子の花にも似たる衣きて黒髪ながく  
うなる我れ

12

九

春の夜の月の中にもかくれまし思ふと君に  
告げえたる後

18



ふる郷の  
船場の街の紺のれん  
すりてなきたる  
つばくらめかな

三 月

一

ものの芽の青くひかれる三月のくるき土さ  
へ匂ひ出にけり



三月の土のにほひも新しき夢を思へといふ  
が如かり

16

二

軟かき髪にも似たる青草に顔をうづめて咲  
く花すみれ

ものかげに隠れて咲ける堇ばな草なれどな  
ほ何かおもへる

春たてば初戀の日のめでたさの如くもの怖  
ぢすみれ花さく

17



三

ひばりひばりカーぱい飛びあがる悲しき飛  
雀こころの飛雀

18

四

しら梅は病める少女の髪の香に似てさびし  
くもなつかしきかな

五

春たてば祇園草紙の作者など來よとささや  
く加茂河の水

春さらばよき花咲かせ人を思ひ野山にあま  
る甘き夢みむ

19



六  
かるくまたいと軟らかき翅<sup>つばさ</sup>もて我れを奪<sup>と</sup>ら  
むと春の來しかな

赤きだりや

一

ここかしこ我がゆく路にさくだりや生命<sup>いのち</sup>の  
だりや赤あかと咲く



むつつりと物も言はなく緋のだりや風に向  
ひて燃ゆるなりけり

朝の日にますます赤し緋のだりや見入るこ  
ころも赤くなるらむ

あまの日の光こぼれて咲く花か物も言はね  
ど涙こぼるる

天を見て祈るが如く咲きつめし真赤のだり  
やものも言はなく



だりやさへ物が言ひたくなりぬらし一心こ  
めて見つむる我に

24

三

大なる緋のだりやさくその前に立てば一度  
に泣きたくなくなりぬ

だりや皆な酔ひたる如く火の如くさく故に  
こそ寂しかりけれ

四

うつくしき謎のやうにも眼の前にびろうど  
色の緋のだりやさく

25



さらさらと秋の雨ふり緋のだりや赤きがい  
よよひかり輝く

26

五

我がこころ緋の大なるだりやより知るもの  
無くて秋のふけゆく

だりやだりや心知りてか此の朝あしたまつ赤にさ  
けり唇づけてまし

六

大なるだりや悲しく我が髪にささむとすれ  
ば崩れけるかな

27



めでたさに瓶へうつせば緋のだりや其處に  
もばつと光さすかな

28

七

何ゆゑか心に少し暇あれば赤まつ赤なるだ  
りや眼に見ゆ

### 思はれ人

一

日も花も我がため名ある春秋とおもへる人  
に涙ながれぬ

29



二

我がこころ捕へ難しと嘆きする君を泣くなり身のほそるまで

さらばただほつれ毛寒く朝かぜによく泣く人とおぼしむ給へ

三

戀人の夢より來しか懐しき朱のいろの蝶水  
いろの蝶

君が住む遠き國より啼きに來し燕の翼はねのひかる朝かな



南國のよき木のかをり窓すぎぬ遠人おもふ  
我が晝の夢

32

四

いと暗き心に投げし種子たねよりか花あまた咲  
く日となりにけり

五

別れより心いためりかりそめと思ひしこと  
も戀にやありけむ

たはむれの輕き言葉の不思議にも我をさい  
なむ日となりしかな

33



六

我がこころ漸く火とも焰ともならむとすな  
り神も手ふれそ

君と我れに時の持て來る枢さへ甘く匂ふと  
思ふこの頃

七

若き日の女をみが建てし城さへも危ふく人に奪と  
られむとする

我が頼む未來の國をぬすまむと悪わるき謀た計くみを  
持てる君かな



八

いみじくも聖ひじりの文を讀むごとく涙もよほす  
君が消息

九

君みれば楽しきものをわりなくも熱き涙の  
頬に落つるかな

青き花空のかなたに笑むと見ぬ君がみ息の  
頬に觸るるとき



戀といふ薄きはかなきもの一つ命と思ふあ  
はれなるかな

たけ長き黒髪ゆるゑの秘めごとを果敢なく我  
れの寶石とする

憂

我れを生みし親の心にしたしまずやや大な  
る憂もつかな



二

ただひとり野に立つ杉の雄々しさよまた悲  
しさよ春夏秋冬

三

君が爲めに祈る心も淺ましく我れに執する  
憂なりけり

四

金らんの我が負ふ帯の重みさへうるさきま  
でに心ものうし

うちかづく髪重きかな男<sup>をのこら</sup>等の知らぬ憂の鳥  
の巢くへば



五

身にあはぬ大き願を持つ故か身の周<sup>まは</sup>圍みな  
涙ぐましき

42

しみじみと泣かば心の安まらむ斯くも思へ  
り泣かぬ身のごと

六

蓬の香春つくる日の憂をば日ねもす焚きぬ  
にがく果敢なく

葉がくれに青ざめてある木の實をばよく泣  
く我に似ると子のいふ

43



七

一人のひとを思へるそれのみにもてあぐみ  
たる我が心かな

44

八

漸くのところ馴れ来て憂さへ無き日はもの  
の寂しかりけり

憂こそ淡きをみな之魂につちかふものと知  
らぬならねど

九

皆ひとと少し違へりよるこびを喜ぶ時も嘆  
きする日も

45



足ばやに通り返ぎよと願ふ日のひと月あま  
り續くかなしさ

46

悲しみもいつか消えむと時を待つ強きこ  
ろを我が持たなくに

十

朝ごとに憂に來鳴く鳩ぼつぼぼつぼぼつぼ  
と憐れみにけり

十一

神を父に生れ給ひし基督の十字架に似る憂  
なるかな

47



十二

狂ほしき憂の波にひるがへり心の貝のひか  
るなりけり

十三

古の史部ふもあはれ我が如く憂ある子をよし  
と傳へぬ

春  
愁



歸らぬ日

一

はた戀し水に文字かく果敢なごとと數多教へ  
し若き日なれど



いつの日の思出ならむ金欄の帯にはさめる  
はこそこの見ゆ

せまさ帯に扇はさみて君が門日ごと通ひぬ  
大阪のまち

山ざくら筏に散るを我がきぬの模様好み  
十五となりぬ

十七や難波はふるさ中船場すだれの奥に琴  
ひきにけり



三

ひとひらの葉の落つるだに嘆かれし少女の  
心今は歸らず

春の草ふめば昔のやはらかき心歸りぬ人を  
おもへと

四

橋の上に白き砂まふ大阪の街まちもなつかし折  
にふれつつ

ふるさとの芥ながるる横堀の水に落せし赤  
きほほづき



なつかしき橋の名などを二つ三つ口走るま  
で戀し大阪

匂やかに物おもひなどすることのふさはし  
かりし父母の家

化物の出るところはごは穴藏をのぞきにゆき  
ぬ久吉と我

張ぬきの虎など吊し薬草の匂ひしめれる大  
阪の家



六

京に來ぬ糺の森の影ふまば昔の夏の我れに  
逢ふらむか

58

京に來て桃われ結へるそのかみの戀しくな  
りぬ今を忘れむ

春

一

ふつふつと粥の煮えたつ音をきく心あかる  
き春の朝かな

59



二

春の風のどかに吹きぬ親と子の異なること  
を思ふ心に

まつ直ぐに樹も生ひ難き赤土の山の肌はだに春  
の風ふく

三

春の夜はほのぼの明けぬ紫に我が髪かかる  
白きみ手より

四

わが歌を口ずさみつつほろほろと涙とまら  
ず春はわりなし



五

らんまんと櫻さきたり君が子の母なること  
も何か寂しき

62

やや長く花を見つめて子は笑めり花の心や  
子に通ひけむ

六

春來れば銀杏の枝も金銀の星の如くに芽を  
ふけるかな

春くれば藏のあはひにほの白く咲けるを思  
ふびんびん草よ

63



七

なつかしく二人の子等が肩よせて何かささ  
やく春の夕ぐれ

八

ほろほろと鬱金いろの花ちりぬ五人囃子ばやしの  
鼓の上に

64

## 夕の歌

夕ぐれの静なる空気の中に、  
しとやかに耳を澄ませば、  
我がかづく黒髪は一筋ごとに、  
言葉なき歌をうたひ出づ。

65



過ぎゆく人生の、  
休みなき時の歩みに、  
調子を合はす旋律か。

青き花のささやきに、  
寶石の輝きに似たる小歌。

## 秘 密

やはらかき我が皮膚の、  
妙にきざむ旋律を、

黒髪のしめやかに語る言葉を、  
また、青き瞳の細かなる味を、



女のみに神が與へし、  
顔の、手の、凡て、身振みぶの、  
かすかなる線の微動を、  
いかで彼かの粗暴なる男の知らむ。  
戀せざる男の知らむ。

このわかき女の祕密。

## 涙

一

我が眼なみだにぬれてある程はこころ豊か  
に匂ひするかな



二

はらはらと涙こぼれぬ白玉の散りおつるに  
も似てこころよく

わりなくも落ちし涙のうつくしさ慕ふか又  
も涙のおつる

三

しみじみと甘き涙のなかに住むことを果敢  
なき幸とする



瀬の音にぬるき風ふき梅ちりて鶴鶴なきぬ  
髪を洗はむ

有明はさびし丘なる一つ家に斜に落ちぬ霜  
のいろして

## 春夜抄

一

くら闇の底より來る物の音もなつかしまる  
る春は來にけり



二

やはらかき風の如くに後ろより物をいふな  
り春の夜の人

三

春の雨まどの外にて我がことを囁くやうに  
思はるるかな

春の雨もの果敢なしと思ふこと書かむと出  
だすらす色の紙



四

うら寂し雑草しげる泥沼ひつじに蛙なきいで月夜  
となりぬ

76

蛙なく我が傍なる我が子よりなほ幼かる心  
地して聞く

五

夢の中見知らぬ人の顔あまた並びかさなり  
涙するかな

うたた寝の我が黒髪の下に入る寸ばかりな  
る籬の列かな

77



赤いまつ赤い緋のだりや、  
天鷲械いろの緋のだりや、  
さはな見つめそ緋のだりや、  
身の衰へはさびしきに。

# 罌粟

一

あきらめて物を思はぬ我が前にうすくゆら  
めく白罌粟の花



二

けしよ罌粟かぜもな觸れそあなかしこ命を  
こめて咲きつめしものを

こわれ易き心とこころ觸るるごと風にもま  
るる虞美人草の花

美しき戀の終のごとくにも零れそめけり虞  
美人草の花

けしの花もろく果敢なく散りにけり若し母  
あらば悲しからまし



三

湯づかれの身をよせかけてじつと見るひな  
芥子の花ひなげしの花

やはらかく匂やかなりし唇のこと思はする  
虞美人草の花

四

麥の穂のなかに交りて芥子の花うすくひら  
めく朝の風かな

うす羽織ほそき襟さへ重げなるたをやめに  
咲くひなげしの花



五

芥子の花先づ誰よりも我が爲めに咲くと思  
ひて黒髪をすく

84

寂寥

一

おのれ我が主ともなり得ずはた誰の使徒と  
もならぬ寂しさに居り

85



二

何事も我に來らずなりにけり餘りに深く心  
とざせば

三

この心日ごと貧しくなりゆくは一つの戀を  
守れる故か

我がこころ漸やく神に近づくと思ふことさ  
へいや寂しけれ

飽き果てし戀人よりも神よりもなほ頼む可  
きものはあらぬか



尼君の清さもあらず戀人の甘さも失せぬ我が昨日今日

88

四

船に乗り旅にある身の心地しぬこれをも我れの家と言はむや

五

火を得むと冷たき灰をかき探す如し心に我をさぐれば

六

山城の山のあはひの川を見て何を待つらむ死ぬ日待つらむ

89



時すでに及ばざるらむ永らへて何を待つ可  
き命なるらむ

七

黎明しのめのあかるき方にもろ手あげ祈らまく欲  
し故しらねども

浅き心

一

あさはかの思ひなりけり男をばいな自らを  
頼みてしこと



二

かるく笑みかるく憂ひて日を過ごす浅き心の悲しかりけり

子の上と厨のことを思ふ外に命ひまなし浅くもあるかな

三

死ぬといふむづかしきこといとやすく思ひ立つ日をあはれと思ふ

あまりにも浅く死なむと思ひしか悲しきが故生く可かる身を



見えぬ世界

四

明日といふ城をたのみてうつけにも今を守  
らず戦ひしかな



見えぬ世界

一

我等より見る天地の外をゆく星に等しと男<sup>そのこ</sup>  
をおもふ



二

女をばなど輕しむる女より生れぬ人のあら  
じと思ふに

三

君の夢と我がみる夢といささかの違ひある  
こそ術なかりけり

四

女には見えぬ世界に時ありて如何なれば君  
の行き給ふらむ

夢にだに我れの見がたき國へゆく刹那の君  
の憎くくもあるかな



み心の捉へ難きは我がこころわからぬに似  
てたがへるものか

五月

一

天地はいと大なる花のごと朝々さきぬ青き  
ひかりに



二

つばくらめ微妙の線をえがきつれ澄みたる  
空の玉の面に

三

子の二人うちささやきてあるだにもめでた  
きものに思ふ朝かな

102

昨日よりおのれよき事あまた聞く五月の風  
の持て來し如く

四

浅みどり遠き世界の消息を秘むるが如き森  
に來しかな

103



匂やかにかはせみ色の羅の中に我がある如  
し初夏の森

104

楠の花みどりの中にほの薫る五月の森の有  
明月夜

五

苗うりの後手しろく塵たてぬ新開町の初夏  
の風

植木屋の小さく刻む鉄より眞珠ちるかと耳  
立つる朝

105



六

をさな子の僅かに歩む足裏の白さを見つ  
つ  
夏は來にけり

106

子の褥しろく輝く初夏の朝の雲こそ淨きよらな  
るかな

七

あでやかなまぢよりが皿に投げられし君が  
葉卷のかをる夕ぐれ

八

今日もまた裏の畑の紫蘇に來て雀あそべり  
品のよろしき

107



なにを嘆くか風ぐるま、  
青田の中にくるくると。  
赤い夕日を身にあびて  
涙をこぼす水ぐるま。

## 女の歌

一

君はなほ夏の鳥の如く、  
樂しげに淺はかに歌ひ給へば、  
我が苦みも、涙も、  
蒼白き頬も知るによしなからむ。



まして我が背負へる十字架を、

『子』といふ重き黒き荷を、

降りつもる雪を、赤き我が素足を、

いかで知り給はむ。

恐らく永久に知り給はじ、知らむともし給はじ。

君は男にて、我は女なれば。

げに戀は男に歡樂と歌とのみ與ふれど、  
我等には盡きざる悲みと、子と、涙と、  
それより生まるる新しき眞の生命を、  
もたらしぬ。女こそ、ああ、戀を讃ぜめ。

二

夕ぐれの心を如何に云ひ出でむ。

この女のみ感じ得べき或るものを。



遠き地平に消えて行く光の微動と、  
しめれる土より、沼より湧出づる靄の匂を、  
我等が細かき皮膚ならで、  
何物かよくわから得む。

また見えそむる星に、水の皺に、  
我が長き黒髪に響きいづる。

この妙なる歌を如何に云ひ出でむ。  
あはれ夕ぐれの心を。女の秘密を。

三

言葉には云へざる故に黙すを、  
なほ語れとせめ給ふや。



廣く大なる世界より、  
我等が感ずるものは、  
大かた斯く妙たに細こまければ、  
男も知る粗あらき言葉にては云ひ難し。

あはれ君も女ならましかば。

## 草花

一

遠く來し和泉の國の初夏の花さへ濡れて見  
ゆる朝かな



二

我れを見て笑まふ子どもの眼の如くうら懐  
しきろべりやの花

116

なつかしき小さき夢持つ紫の瞳に似たるろ  
べりやの花

三

ひやしんす白く冷めたく匂ひけり消息をだ  
に給はらぬ家

うす青き玻璃の中にもひやしんす夏を感じ  
て咲けるあはれさ

117



蓄<sup>つぼみ</sup>みな眞珠の如くうるほひぬ我が傍のひや  
しんすの花

118

四

さかしげに物いふ人を思ひ出ぬ白き一重の  
牡丹さく時

五

くちなしの匂ひをかげば未来さへうすき憂  
にぬれて眼に見ゆ

六

はなあやめ五月の風にゆらめけば夢と憂の  
うち騒ぐかな

119



少女の日ふたたび返す風ふきぬあやめの莖  
に花もゆる時

120

遠人の知らぬ寂しき世ぞ見ゆるあやめさく  
野に風のかをれば

七

さつき來ぬ水のほとりの花さへも少女の如  
く心みだれむ

唇づけをうくる瞬時の我れに似て朝のひか  
りにふるふ花ぐさ

121



八

花さうび二尺の棚と黄の蝶の雌と雄を吹きぬ初夏のかぜ

物おもふ我れに代りて泣く如く白蠟色の花さうび散る

九

山の風うす紫に花ふきぬ河原にそへる初夏の路

青野原水より來る初夏の風にぬれけり石竹の花



われ昔少女子にして思はれし日の様に咲く  
紅ゆりの花

124

十

なやましくじつと見つむる草原にほのかに  
匂ひ甘草のさく

太陽の光のいろに赤々と甘草咲けり七月の  
あさ

夏の日の強き光を身にこめて甘草さけりか  
なかなの啼く

125



十一

日輪に似たる黄金の花さける中に君見し夏の  
家かな

十二

まんまろく金米糖草ひかりたり故なき涙は  
ふり落せば

十三

不思議なる鏡とやうに青空をのぞく我が子  
と向日葵の花



きみとほくそらのはてよりかへりこし  
ごとくにおもひくちづくるかな

いづちへもいなむくになきよのつねの  
をみなとあはれいつなりにけむ

## 水の皺

一

水の皺くちづくるごと震へたり青水無月の  
朝の空氣に



二

夜の空に星ある如く白き花あまた光れり初  
夏の水

130

曇日の水にうさたり悲みの瞳に似たる白き  
藻の花

三

さくらんぼ少女の如く羞らへり玻璃の器に  
身のつつましく

櫻實さくらんぼ さくらんぼ皆頬をよせて囁く如し夕ぐ  
れの卓

131



四

黍の穂のやや傾むかむその頃に再び見むと  
別れけるかな

五

ひらひらと風車まふ青き田と湖と戀しきふ  
る郷の山

風ぐるまじつと動かずむづかしき顔して獨  
り入日ながむる

日にひかり青田のなかにきらきらと玩具の  
如き風ぐるま舞ふ



六

土焼けて暑さに黙し人あへぐ街をまだらの  
大牛のゆく

重き風夜の街ふきぬ大地震おほの今來こるごとき  
もののあいろに

秋のおとづれ



秋 來 る

一

秋來れば旅ゆく人も眼にかなし戀の痛手を  
負へる如くに



二

木曾河や針金をもて吊したる橋をふくなり

初秋の風

三

秋の來て漸やく我れに靜かなる心を與ふ深く見よとて

秋よ秋よものを思へる我が肩に手かくる如く鞭うつ如し

四

秋の來ていたづら臥しも漸やくにももの羞かしくなりにけるかな



秋立ちぬ夜ごとにぬらす涙ゆる髪さへいと  
ど細りそめつつ

五

青桐の青き葉かげの蟲さへに身の細るらむ  
初秋の來て

かさこそと桐の落葉に音たてて土くれの如  
く鐘叩きとぶ

六

雲よりか大空よりか何となく心に落ちし初  
秋の影



また秋の來りて我れに唇づけぬ我が若き日  
を咒ふごとくに

142

秋の來て始めて知りぬこの心うすでの玻璃  
のごとくいたむを

君が手を放せし時のたよりなきもの寂しさを  
に似て秋は來ぬ

七

新らしき藁のほひと鳥の巢の卵のいろを  
思ふ秋來ぬ

143



尾をひきて空を流るる星にさへ心ひかるる  
初秋は來ぬ

海

一

波の音よ波の響よ一心に聞けば尊く祈らる  
るかな



二

静なる海はるばると見入るなり何とも云へ  
ず心足らへば

思はるる忘らるるはた何かせむ大わだつみ  
の色に見ほるる

三

朝の風白き鳥とぶ海に来て我が心をば見る  
と思ひぬ

紫の花のやうなる大海の上にも安き夜床つ  
くらむ



四

波しろき磯につくばひ蟹の子と遊びながら  
も涙をながす

148

足あかき蟹は蟹としたはむれぬ憂ひて一人  
歸る渚路

五

しろ銀の海の光にふと浮ぶ濱木綿はまきわたのさく我  
が母の國

我がねむる墓となつかし月光の夢みるごと  
く漂へる海

149



六

しめやかに泣きて物いふ姉の手を肩に置き  
つつ海を眺むる

150

遠方に雷いかづちすなる黒き海うれひある身の足ひ  
たし來る

七

曉の波にぬれつつ涼やかに瞳の如くひかる  
貝あり

波にぬれ赤くひかれる貝を見て血のにじむ  
やと驚く夕

151



何事も笑めるが如き大海の静なるさへねた  
まゐるかな

### 日常生活

君が興ふるままにわれは生きむ。

春の日と、優しきことばと、  
霜と、また甘き木の實と、  
時ならぬ嵐と、雨と、夜の吹雪。



若き血と心とを喰む、  
幾人の子を興へ給ふも、

おとなしく、しとやかに、言葉なく、  
君が興ふるままにわれは生きむ。  
されどその時、  
わがながす熱き、また冷たき  
涙をば君は答めじ。

さらにまた赦し給はむ。  
浅はかのうは<sup>心</sup>心に、  
君が興ふる生活の、  
いろさまさまの姿より、

人世のまことの意味を、  
深き心を、君がもつ寶石の光を、



ひそかにわが集め拾ふを。

そは君にかかはらぬことなれば。

ものかけど魂そはずなみだのみ紙に  
にじみぬあぢきなきかな

### 張なき心

一

無量劫君と我れとを遠ざけしかりそめごと  
も憎まむとせず



二

いつ時に君を刺さむと思ふこと漸く遠くな  
れる寂しさ

並ならぬ戀がたきをも物敷とおもはぬ心張  
なきころ

三

馴るるとは倦むに等しいふことを戀に始  
めて見いでたるかな



四

味氣なし人にかくれてすることの稍多くな  
る心の終

あき足らぬ戀の故にかあき果てし戀の故に  
かもの味氣なし

嗟  
嘆

絹よりも滑かに軟かき、  
美しき女の皮膚を、  
— 暖かき花びらを —  
さらに又その上に這ひただよふ、  
微妙なる花のかをりを、



黒髪を、語る腫を、  
あつき火の唇を、

凡てかかる上部うへぶのもののみ、  
愛でしるる男こそ、  
悲しくも、いとあはれなれ。

我は知る、我は知る、男よ。  
かくて人の世は永久に失はれたり。  
我が爲めに――否、否、さらに汝が爲めに、  
男よ。







長雨のわびしき庭に夕さればうち萎れつ  
つ  
さける月くさ

169

二

砂の上に置かれし船にしらじらと夜あくる  
磯の月くさの花

夕なぎの渚にさける月見ぐさ身をあきらめ  
し寂しさの見ゆ

黄なる灯のところどころにともるごと川の  
洲に咲く月見草かな

167



秋の風

一

秋の風西の空ふく燕われかいろの寺の塔に  
歸らむ

三

月くさや木立に小さく花さきぬ我が生ひ立  
ちになぞらへてまし



二

白樺に秋の風ふく山國のあしたの雲にした  
しめるかな

170

秋の朝我が手たたけば白雲の湧き出づるか  
とおもふ山の家

三

あちら向き木々もかなしく嘆くらむ秋風ふ  
きて心ぼそさに

あな尊と秋の木の葉も木の幹もひかりて我  
にものをいふかな

171



四

をとめの日思ひ出づやと秋の風おどろかし  
來ぬ君が子の母

五

たそがれの鏡に向ひくしけづる白き腕に秋  
の風ふく

秋の風さびしそれよりやや強き吐息は來る  
一人し居れば



米萩のこぼれしごとく紅いろの蟹の子  
あそぶ渚の砂に

蟹よ蟹よ厨の隅の菜の上を花の如くも  
赤く走れり

# 白き朝

一

我が言葉あまり冷たく響くをば我れと驚く  
秋の朝かな



二

爽かにねむり眼ざめし枕もと秋に匂へる新  
聞紙かな

食卓のすうぶと麵麩と髪かみの香とみな爽かに  
匂ふあさかな

三

林檎りんごの香あまく冷たく匂ひ來ぬ泣きあかし  
たる朝のつかれに

林檎りんごりんど頬赤のりんど汝みづかがいだく甘き夢  
よりしたたる匂



四

我が閨の妻戸のはしに青すすきいとたよげ  
にも靡く朝かな

いと軽く心ゆくことある如く思ひて寢屋を  
起き出づる朝

五

子に乳をふくませ乍ら快き霰の香にまたね  
いる朝

六

少女らの眞珠に似たる心さへうすすき憂にく  
もる秋かな



七

こころよし秋の日しろき舗石に玻璃の器を  
あとせし響

途 上

一

うきことは憂きことにして萩ささやう撫子  
さける路を旅ゆく



二

しびと花あかあか咲きて松つづく暇路に立  
つ砂ほこりかな

三

あきらめて寂しき笑みを頬に浮べ丘を降れ  
ばかなかなの啼く

十月の風にふかれて草の葉のほのかに匂ふ  
別れ來し路

四

空さして震へ戦く草の蔓なにを求むる心な  
るらむ



たぐりたる蔓の先きにも赤き花あはれに咲  
けり初秋の朝

184

路の花つまむともなく手にとればうすき匂  
ひの指染むるかな

五

襟さむく柳の落葉ほにふれぬかくてもひと  
り思ふおとろへ

六

山の鳥きり降るなかに音をたてぬ我が心よ  
り飛べる如くに

185



大なる山の力やせまるらむ山に見いりて低  
く牛なく

186

七

薄の穂そのいちめんの漣のあひだより飛ぶ  
瑠璃いろの鳥

しろ銀の穂すすき靡さやはらかに我が肩な  
づる野を一人ゆく

八

二十四時かなしき夢に疲れたる姉をおもひ  
ぬ枯草の香に

187



九

枯れ葦に細き月さし夜の泊こぼるぎなきぬ  
我が船の底

188

我が船は赤き柑子の山うつる朝の港に帆を  
まきて入る

十

冬の丘かれし銀杏の大木の幹にこぼれし玉  
あられかな

189



寂しき日

ひとすちに我が前を見つむる時に、  
花さうびいみじく匂ひ、  
百合のはな織手をあげぬ。  
わが路のうれしき障碍。



午  
後

一

渡り鳥二つらばかり過ぎゆきぬ涙のいろの  
海の上をば



二

つつましく古き都の街上に女ものいふ秋の  
晝すぎ

夕ばえの明るき街を笑ひゆく女の群に柳の  
葉ちる

三

乳いろの芭蕉の花の零れたる黒土のいろ秋  
に匂へり

味氣なく物おもふらむ容姿かたちしぬ厩の横のな  
でしこの花



小さき下駄四五足ならぶ離家の硝子障子の  
前のこすもす

196

四

大寺の石の楷段のぼり行く銀杏ぎんぎょういろの帯に  
日のさす

大寺の舗石をふむをさな子の沓の赤きに飛  
ぶ秋の蟲

五

夢のなかの世界より來し數萬の小さき蝶か  
白はぎの花

197



糸萩のみだるる庭にあそぶ子は白地錦の袴  
きせまし

六

食卓の上に匂へる白菊にその前髪のかくれ  
たるかな

別れたる後のところにうす寒くしんと浸み  
入るしら菊の花

七

子の持てる風船玉の破れたる音も果敢なし  
秋の晝すぎ



首ふりの人形かなしく人を見て物いふらし  
き秋の午後かな

夕

一

灰いろの幻の鳥眼の前に肩にとぶなり秋の  
夕ぐれ



二

渚なる葦の葉さきにとごとく蜻蛉のとま  
る秋の夕ぐれ

三

蝶二つ厨の前の黒き戸に模様の如くとまる  
夕ぐれ

我が閨の帷のはしにうすき朱の蝶の遊べり  
君や見に来し

空いろの帷をひけば金銀の蛾の來てとまる  
閨の宵かな



をさな子に交りて今日も歌うたふ秋の夕の  
雲ながめつつ

四

秋の日は力いつばい大比叡の夕いただきを  
赤く照らせり

大なる入日あかあか照しけり秋の心も赤く  
悲しむ

遠人に金鳥放つ思ひしぬ夕日のいろの雲の  
ながれを



五

秋雨にぬれし傾斜の草原に夕日かがやきこ  
ほろぎの啼く

十月の雨の中にてちちと啼く鮎の聲に身の  
はかなまる

ぎやまんの壺に盛りたる薬草の匂ひしたし  
き秋の雨かな



願ひしは戀慕名聞歌技藝何をえとげし  
我といはまし

やるせなき戀かなさけか大阪の街縦横す  
ゆく春の水

## 舞の師匠

晝さがり、冬の日の  
黄にさす壁にもたれつつ、  
三味とりて自隋落にひきて見れど、  
昔覚えし歌のふし、  
あはれさのみが身にのこりて、



かずは大かた忘れたり。

思へばこの頃の氣ままわがまま、  
またなすこともなき所在なさ、  
ここに張のなき故か、  
花のいろさへだるく見ゆ。  
かかる目にわけて戀し、  
かの嚴しかりし舞の師匠。

今は叱る人さへなきさびしさ。

わが兩手

かたみに知らぬものごと

少しふるへぬ

指をくむ時



かがみ

なにとはなしに悲しきまま、  
ふと思ひたつことあり、  
髪かきあげて香油さし、  
うす白粉もつつましく  
鏡の中のわが姿を

いつまでも見てゐたれば、  
心漸くなごみゆけり。

こは今迄心づかざりし  
耳の下のふくろの可笑しかりしにもよれど、  
またわが眼の奥にも  
われと等しき女ありて  
われをあはれむを見たればなり。



あはれ誰ぞ誰ぞ。  
彼の女ほこらしげにわれをあはれむ。

鴨川べり

一

比叡の山冬来る日も紫にあでに若かかり頂  
のいろ



赤々と大比叡の山もゆるなり心わびしき初  
冬の夕

216

大比叡の山を眺めて山のごといと静かなる  
心となりぬ

二

廣重の繪より美し祇園町たそがれ時に雪の  
ふるとき

いろ街の灯ともし頃をしらじらと雪の散る  
こそなまめかしけれ

217



三

友染を水につけつつ逢ひに來し人ともものい  
ふ河原の男

218

京の山青く輝やく塔さへもひかりて見ゆる  
初夏の頃

四

舞姫の床几の下の水のいろ青く動ける夏の  
宵かな

寢て聞けば祭の囃子こころよく水を渡りて  
なまめく夜かな

219



五

南座の太鼓の音も水越えて我れ泣かしむる  
夏の夕ぐれ

220

馬車の扉をいづる頭上にはたはたと心地よ  
く鳴る歌舞伎の幟

六

ひそひそと語らふ聲と瀬の音とまじる河原  
の星あかりかな

高野川野ぎくと蓼のひまびまに水ひかるな  
り有明の月

221



七

加茂川の金と銀との砂ながす曉の水夕ぐれ  
の水

回顧

一

見かへれば死よりも更らに難き路つまづき  
つつも君と來しかな



二

をみなてふ悲しき名より永久に遁れむとし  
て君によりつれ

三

生き死のさかひに靡く一線をわれ巧にも渡  
り來しかな

よろこびに悲しさ交り悲しみに嬉しさ交り  
今日までは來ぬ

四

その中のいづれと知らむ思ふをも思はざる  
をも愛で給ふゆゑ



五

幾度か刺さむとしたる胸の上に我が額おき  
寐る夜となりぬ

六

君われの世に來れるやはた我れの紛れ入り  
しや君の世界に

よろこびの胸のひまよりしたたりぬ過ぎし  
日を泣く寒き涙は

七

地の上の小さき蟲の幸すらも我れ無かりし  
と思ふ頃かな



八

君ゆゑに常少女にてある人は妻の我れより  
優して妬まし

九

悲しみも若くにほひしその上は今の心に懐  
しきかな

匂なき過去と現<sup>い</sup>在<sup>ま</sup>とに飽き足らぬ心をはな  
つ未來てふ野に



枯草の上にもろびていつ時に涙おとせば  
やや心なぐ

おぼろ月させば昔の君と來し磯の路さへ  
眼に浮ぶかな

## 悪夢

一

長からぬ美しからぬ戀ゆゑに惜しくも髪の  
亂れけるかな



二

黄金か珠かの如く明日の日をたのみし戀も  
終りけるかな

232

ひたすらに心いそぎぬ終ある戀ともとより  
知らざりし故

三

華やかに君笑らふとき味氣なきこちしそ  
めぬ故しらねども

甘き味ひと日ひと日に消えゆくを互みに感  
じ云ふを憚る

233



四

おもはれぬ日の重なりて漸くに君をおもふ  
と知りそめしかな

234

いな我れはおのが心の火の海を渡り越えむ  
と叫びながらも

五

この世には再びあらぬかたらひを静に思ふ  
森かげの路

幻の世界に君を見まつらむ外に術なくなれ  
る我れかな

235



君をみず逢はずこのまゝ死にたらばよそ人  
さへも涙ながさむ

六

ふと飽かばふと遁れむと用意せる君が翼を  
切らむ術なし

忘るてふ言葉めで度し男等の命にまさる寶  
なるらむ

七

眞實をただ頼み來ぬ戀にこそ深きたくみの  
なくてならぬを



蓬ぐさ雨にかをりぬ古りし日の心の底の夢  
八  
の香のごと

空よりかはた我が枯れし胸よりか落葉こぼ  
れて泣かまほしけれ

人間のそのあはれさを日もすがら笑ふごと  
くも木枯のふく

雨ふれば心に憂もつごとくしよんぼりと立  
つ野のひとつ杉



ふつつりと君を再び見はせじと思ふもせち  
に戀しきがため

240

跳ね返りとんぼがへりをうつ霰とんぼがへ  
るか強き嘆き

九

我れひとり涙ながして灯ともせばいづ方と  
なく君の聲する

うるはしき冷たきなみだ頬を走る裏切る人  
をあはれむが故

241



十

君を刺す利き刃トの如きひと言を放たむとし  
て寒かりしかな

十一

なるままになれと冷たく思ひ捨つ命をかけ  
し戀にやはあらぬ

戀の火に燃え盡してか我がこころ洞ほらの如く  
に静かなるかな

十二

悪夢よりさめし如くに汗ばみて漸く戀を遁  
れ出しかな



いまはしき  
誹謗のなかに  
微笑める人のかなしさ  
はたおほらかさ

くりすますの頃

一

とつ國の人と思へど聖まりあ同じ少女とき  
けば祈らる



二

玩具屋のごむ人形の青き眼も悲しみて見ゆ  
雪ちる夕

246

青白く雪のふる日は舞扇はさめる襟も見て  
悲しけれ

青白く雪ちりそむる黄昏は繻子の帯さへ手  
にかなしけれ

ぬぎ捨てし羽織の裏の甲斐絹さへ泣くが如  
くに青む夕ぐれ

247



三

我が顔に砂つぶて打ち快く笑ふに似たり初  
冬の風

夕日あび冬の空氣にさらされる山の肌もか  
なしかるらむ

四

すり硝子青める上に水薬の匂ひうかべて冬  
の日さしぬ

病院の硝子の窓にふり消ゆる夕ぐれ時の青  
き雪かな



五

鈍いろの憂の帷ふかく垂れ冬の日嘆く時雨  
する空

250

冬の雨なげくが如く降りそそぐ窓に向へる  
水仙の花

六

紙きざむ小さき子の手の鉄さへ冷たく光る  
冬の朝かな

七

人參のあまき匂ひのゆくりなく物おもはす  
る厨の夕

251



母  
と  
子

八

仰ぎ見て涙こぼれぬ青じろき入日の中に立  
てる常盤木

水晶のごとく冷たく透きとほる心となりて  
冬に入るかな



若き母

一

初秋のさやけさものの音いろさへ興なくな  
りぬ人の子の母



木の葉ちりをかしき秋も何故か今年は悲し  
人の子の母

256

二

やはらかき我が身の中に心臓の二つ鳴るを  
ば感ずる刹那

三

子てふもの諸手に來り觸れしより君を忘れ  
ぬあはれの女

みづからを如何に名よばむうら若き妻か  
いな人の子の母

257



四

若き母おのれを飾る寶石の一つの如く子を  
思ひをり

五

心なき山の石をも親と子と思ふも母となり  
ける故か

人の子の母なる故か風にとぶ草の實にさへ  
心ひかるる

六

六<sup>レ</sup>歳の子の母なる今もそのかみの夢よりさ  
めずひな芥子の花



うら若き夢の數<sup>あまた</sup>多は消えねども二人の母と  
なり果てしかな

260

七

桐の花うす紫に散りかかる母の憂を知りそ  
めし日に

心ただ細く鋭くなりけり子にかかはれる  
物おもひより

球<sup>たまご</sup>乗の小さき娘の笑顔さへ涙さそひぬ人の  
子の母

261



八

大なる憂のはしに子の事も少しおもへりう  
ら若き母

九

母となりて漸く知りぬ匂ひある心の住める  
静かなる家

十

新らしきお伽ばなしを子の爲めに考ふる日  
となりけるかな

子の爲めのお伽ばなしの中にさへ若き憂を  
こめてかたれる



十一

母として未だ十とせも過ぎなくに知りそめ  
しかな母の寂しみ

十二

子の母と妻といはれむ願ひより君を思ひし  
我れならなくに

264

## 子

一

漸やくに明るき方とこの母を見しりそめた  
る子のままひかな

265



二

物皆に花さかしむる力ある笑聲かな我が子  
ながらに

266

三

膝立てて這ひよる稚子の足あたまうらに秋の日さ  
して痛ましきかな

四

青き海青き大ぞら眠る子の夢より續く心地  
するかな

小さな貝殻のごとくす赤み眠る子の手の  
美しき爪

267



五

むづかりて張子の虎の耳をひく子のつぶら  
眼にやはらかき風

268

湖の風きてふきぬうす色の蚊張の中なる子  
のしろき足

石竹や百合や野ざくや子のために夏が持て  
來しいみじき香爐

六

ものあはれ知れるが如くうつむきて籠の小  
鳥に餌をやる娘

269



なつかしき眞珠のいろの光さす小さき子の  
手と水仙の花

水仙の白き花瓣も黄の蕊も子の毬うたに聞  
きほれてあり

兒  
よ

花を見よ、  
汝が爲めに我が置く赤きだりやを、  
また寶石を、この胸にかかる十字を。  
やよや兒よ、我が兒よ、  
さはな見そ、我が濁るこの瞳を。



汝がひとへ心の白妙に、  
水の如くに澄める眼に、  
人の世の憂をうつさむは、  
あまりにも惨<sup>あは</sup>たらし。

ただ見よ、紅き花を、よき珠を、金の十字を。  
母よりは之等こそ汝が眼にはかなへるものぞ。

花を見よ、花を見よ。  
我が見よ。



わが娘ふく風にほへ花さけと蝶の如くに  
春を待つかな

母と子

一

をさな兒の遊びの如く美しく眞實こめて世  
に生きてまし



二

我が膝に子のすがる時おほけなくまゝりあの  
如き心わくかな

三

我が子らの春日のごとく輝やける瞳をみれ  
ば思ふことなし

子を見れば我が命なほ永久に生くるあかし證のご  
とくめでたし

四

子の爲めに我が命をも捨てましといつ誓ひ  
たることならなくに



鳩ぼつぼ子等とうたへば鳩ぼつぼ身さへ寂  
しくなりにけるかな

278

わが産める少女の髪に薔薇さす手の衰をは  
かなみにけり

五

秋の晝何おもひてか五歳いっつの子母をみつめて  
涙ぐむかな

紅ききぬ子の初著にと裁たつ指に缺つめたく  
なれる頃かな

279



我れなくて寂しき床にひとり寝る娘の冷え  
し足など思ふ

280

果敢なげに雪のかかれる連山を子も見やる  
なり我と等しく

六

泣きながら偽をいふ偽を悔いてまた泣く子  
のいぢらしさ

子を叱る私の言葉に我れ乍ら我が身あはれ  
と思ひけるかな

281



みづからを憎むが故に我に似る我が子の癖  
を憎みあはれむ

282

七

我が子ども百合や薔薇にあらなくに心の野  
邊に甘き香を吐く

八

我が子等が母とし我を頼むごと自ら我れを  
たのみえてしが

九

物云はずただ一心に遊ぶ子を見れば心の寂  
しくなりぬ

283



同じ木に咲きたる花ははらからか斯く子は  
問へど母は錢よむ

神よりも我をたのめる子二人の母ともなり  
ぬ生けるものから

### 金沙集目次

をとめの日	を	と	め	十五首	.....	五
	三	月	十	首	.....	一五
	赤	き	だ	り	や	十五首
	思	は	れ	人	十八首	.....
						二九



憂 十九首……………三九 Ⅱ

春 愁

歸らぬ日 十五首……………五一

春 十一首……………五九

夕の歌 詩一篇……………六五

秘 密 詩一篇……………六七

涙 四首……………六九

春 夜抄 八首……………七三

罌 粟 十首……………七九

寂 寥 十一首……………八五

淺き心 六首……………九一

見えぬ世界

見えぬ世界 六首……………九七

五 月 十三首……………一〇一



女	の	歌	詩三篇	一〇九
草	の	花	二十四首	一一五
水	の	皺	十一首	一二九
秋	の	おとづれ		
秋	來	る	十四首	一三七
海			十四首	一四五
日	常	生	活	
			詩一篇	一五三

張	な	さ	心	六	首	一五七
嗟			嘆	詩	一篇	一六一
つ	さ	み	草	六	首	一六五
秋	の	風	八	首		一六九
白	さ	朝	十	首		一七五
途		上	十	六	首	一八一
寂	し	さ	日			



午	後	十四首	一九三
夕		十二首	二〇一
舞の師匠		詩一篇	二〇九
鏡		詩一篇	二一二
鴨川べり		十四首	二一五
回	願	十二首	二二三
悪	夢	二十五首	二三一

くりすますの頃	十五首	二四五
母と子		
若き母	十九首	二五五
子	十一首	二六五
兒よ	詩一篇	二七一
母と子	十九首	二七五



金沙集 をはり

大正六年一月十七日印刷  
大正六年一月二十日發行

(定價八拾錢)

著者 京都市河原町荒神口上ル 茅野雅子  
發行所 東京市神田區南神保町十六番地 岩波茂雄

(含 英 秀)

發行所

東京市神田區南神保町十六番地

岩波書店

電話本局五四二〇番  
振替東京二六二四〇番







